



四万十町

町内「ぶら〜」散策

上

かみ

岡

おか

先 月号の下岡から東へ。下岡の直線を過ぎると国道は左へと緩やかにカーブする。右手の四万十川に美しいデザインの沈下橋が見える。上岡の沈下橋である。正式名は向山沈下橋。この橋が架けられるまでは、これよりおよそ40m下流に舟渡し場があり、対岸との往来にあたって人々は渡し舟で往来するしかなかったが、昭和38年、住民たちの念願が叶い、この沈下橋が完成した。落成記念式典での「いつまでも続く餅投げ」に見る人々の歓喜の様子は2013年10月号で記した通りである。

上岡は下岡や瀬里などと同様に河岸段丘（川に沿って隆起した土地）の上に形成された集落である。縄文時代の土器が発掘されているということも同様で、ここ上岡でも古代から人が生活していたことを裏付けている。庄屋制度が敷かれた江戸期には、上岡・下岡・四手ノ川（現希ノ川）・瀬里を上岡四ヶ村とし、それらを統括する庄屋がここ上岡に置かれた。当時はこの四ヶ村くらいの規模であれば、統括（轄）集落には庄屋のみを置くところであるが、上岡の場合は、庄屋を補佐する「老役」もつけていたようである。理由はわからない。

地区の産土神である河内神社には、音無神社・王子宮・金刀比羅神社・竈戸神社・大元神社・地主神社の六社が合祭されている。また、これより北に500mほど行ったところに小さな祠がある。大山祇（おおやまずみ）神社である。上岡には茶堂もあった。この茶堂は現在の集会所の場所にあった。集会所には今も仏像が安置されていることは2013年に紹介したが、

実はこの茶堂には、東覚菴という禪宗のお寺も一緒に祀られていたようである。

さて、先月号の下岡でもふれた、上岡にあった鉾山について。集落から上岡谷に沿って1.4km上り、左手にある橋を渡りさらに約1km行ったところの裏山に坑道跡がある。ここでは戦前にアンチモンが採掘されていた。アンチモンは鉛などと合わせて様々な工業材料として、また電池や防炎物質として使用されてきた鉱物で、明治初期から使われてきた。今では代替物質が使われるようになっていく。一力所ある坑道跡と三ヶ所の試掘穴も残っているという。日本で産業として本格的な採掘が始まったのは明治になってからのことなのであるが、そもそも、なぜ、上岡のこの場所を採掘することになったのか不明である。世界的に見ても、アンチモンは古代から顔料として使われてきたらしい。やはり、古代の上岡ではすでに採掘していたのかもしれない。近代になってアンチモンが着目された時、すでに「ここにあることはわかっていた」のかもしれない。想像が膨らむ。



採掘が行われていた頃の貴重な写真が残っている（大正町史作成の際に広田哲男氏より提供）

町のうごき		10月31日		前月比		出生		死亡		転入		転出	
		男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
		7,705	8,446	-16	-16	1	4	14	20	7	12	10	12
計		16,151		-32		5	34	19	22				
世帯数		8,255		-9		(10月中の届出)							
窪川地域		11,455人			大正地域		2,248人		十和地域 2,448人				

四万十川の水質状況		適正值(mg/l)	11月10日
リン酸	≤ 1.0	測定範囲以下	
硝酸	≤ 0.5	測定範囲以下	
アンモニウム	≤ 5.0	測定範囲以下	
アニオン活性剤	≤ 1.0	測定範囲以下	
化学的酸素要求量	≤ 10.0	0.05	

調査：大正（吾川）
資料：四万十高校自然環境部